

みこころ

第14号

2009年
12月25日

発行元:

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)<http://johokubashi.mikokoro.net>



INDEX

- 「降誕祭、おめでとうございます」 プリヨ・スサント神父 (p2)
- 「Gloria in Excelsis Deo」ヘルマス・アスンビ神父 (p3)
- 「神学生日記」 片岡義博 (p4)
- 「祝クリリー神父 叙階50周年」川口琢 (p5)
- 「聖心の霊性は生きています」シスター・クララ 林 (p6~7)
- 「緊急支援活動の報告」世話係り一同 (p8)
- 「寄稿」若林英樹・片岡達哉・松井淑子・飯田京子・後藤明憲 (p8~11)
- 「葬儀問答シリーズ」田口保 (p10)
- 「不思議発見シリーズ 最終回」(p11)
- 「信者動向」(p12)

降誕祭、おめでとうございます

主任司祭 プリヨンスアント

カトリック城北橋教会共同体の皆さん、降誕祭おめでとうございませう。今年も皆さんと一緒に降誕祭のお祝いを準備し、そしてこうして祝うことができたことを幸いに思い、神に感謝し、皆さんにも感謝いたします。

主イエスの降誕のお祝いは、神の愛のお祝いなのです。目に見えない神が受肉し、幼子イエスを通して私たち人間と同じ姿をとってご自分を現してくださいました。神は、天高く人間から遠く離れる神ではなく、わたしたちの間に、わたしたちと共に、お住みになりました。神がわたしたちを愛し、一人も滅びることなく、全ての人が神の救いに入るように招き、望んでおられます。ご自分の愛を示すために、わたしたちを救うために、神は来られました。

主イエスの降誕を記録するルカ福音書は、こう記しました。「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心になつう人にあれ』」主イ

エスの降誕は、神の栄光と同時に、わたしたちに平和をもたらす出来事でした。

にもかかわらず、今、現代のわたしたちの世界は、平和な世界とは言えないのです。神に愛

されるわたしたちの尊いのは、わたしたちの手によつてお粗末にされています。子ども虐待は日常茶飯事のニュースとなつていくような気がしてなりません。一人ひとりには違つた

理由があり、背景には様々な事情はあるのでしようが、日本国内の自殺者の人数は三万人を超えて、言うまでもなく高いままです。ストレスのたまりやすい社会の中には、平和があるとは言にくいものです。世界レベルではテロは今しばらく止む気配はなさそうです。戦争もどこかで今も続いています。そのために貧困の問題、難民の問題は、永久に終わらないものとなつてしまつたのではない

かと絶望に近い思いがします。キリスト者のわたしたちは無関心にいられないはずで、神の愛を知つて信じるわたしたちには使命があります。その神の愛を特に苦しみの中に生きる人々と分かち合うという使命です。特に降誕祭を祝う喜びを恵まれる今、神に愛されるいのちの尊さへの関心を高めたいものです。他人のために自分にできることは何かを見つけて、それを共に実践していきたいものです。



九月六日(日)に神父様の誕生をお祝いしました。実際の誕生日は九月七日で、恥ずかしがりやの神父さまなので教えていただけませんでした。四十歳らしいです。いつも笑顔でお洒落な神父様のご健康をお祈りし

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和。御心になつう人にあれ」。この主イエスの降誕を告げる神の天使の歌は、神と人間との間のかかりを啓示しています。主イエスの誕生において神はまったく新しい方法で、わたしたち人間との関りを「再創造」されるのです。神の「受肉」は神の啓示であり、神のわたしたちとの新しい関り方でもあるのです。神ご自身が人間のわたしたちに近づいてくださったのです。この新しい関り方によつて、神は愛であることが、わたしたちにも分かるようになり、神と共に生きる喜びが、わたしたちからあふれ出るようになるのです。降誕祭、おめでとうございま

Gloria in Excelsis De

助任司祭 ヘルマス・アスンビ



「娘シオンよ、

喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ。主はお前に對する裁きを退け、お前の敵を追い払われた。主はお前のゆえに喜び樂しみ、愛によってお前を新たにする」
(ゼファニア3・)

14、15、17)。この御言葉を読んで、確かに神様がご自分の民の滅びを望まれていないことを改めて感じました。神様はご自分の民を訪れ、罪の束縛から解放してくださいました。その救いを成し遂げられたのはベトレヘムでお生まれになったイエス・キリストでした。そのため、イエス・キリストの誕生はまさに神の民であるわたしたちを励ます喜びなのです。このクリスマス祭りにあたり、使徒パウロが教えているように、まず、主において喜びましょう

(フィリピ4・4参考)。

イエス・キリストは救い主、あがない主としてこの世に遣わされました。この救い主は人間のみじめさを帯びながら、素朴な乙女マリアから生まれ、父の定められた愛の計画を実現し、わたしたちに永遠の救いの道をお開きになりました。つまり、イエス・キリストにおいて、イザヤが預言したように、わたしたちは神様の救いを仰ぎ見ることができました(イザヤ52・10参考)。昔は神様が預言者を通して民に語られていました。今はみ言葉であるキリストを通して神様がわたしたちと共におられます。そして、わたし

たちはキリストの執り成しによって、あるいはキリストと共に父である神に向かつて歩んでいきます。

なぜ、神様が人間を救ってくださったのでしょうか。その答がヨハネ福音書の中で書いてあります。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3・16)。愛の上に、神様がわたしたちを救ってくださり、愛によってご自分の民をイエス・キリストにおいて新たにされました。それで、愛の祝い、愛の祭りとして、クリスマス、イエス様の降誕を祝うことになっていきます。その中で神様がわたしたちと共におられる喜びを味わうことができるのです。イザヤが預言したように「インマヌエル」、神様がわたしたちと共におられます(イザヤ8・10)。イエス様ご自身も「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28・16c)と言われました。その喜びのうち、天使たちの歌に声を合わせ、神様を賛美しましょう、「グロリアインエクセルシスデ

九月六日、助任司祭歓迎会で花束を受け取られて笑顔のヘルマス神父様

ヘルマス神父様、お誕生日、おめでとございます。

一九七六年九月二十九日が誕生日、なんと三十三歳の若さなのです。神学生時代から落ち着いた方でしたので、社会人として働いておられてたのだるうと思っていました。子供の頃から、深く考えるタイプだったので、実際の年齢以上に見られることが多かったそうです。こうして誕生日を祝っていたとき、神様と皆様に感謝したいと語っておられました。それにしても説教も、歌ミサも素敵な声で、早くも貫禄たっぷりのおペテラン司祭ですね。

オ、いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ(ルカ2・14)。神様が救い主の降誕を通してわたしたちを喜ばせてくださったことを熱い思いで感謝いたしましょう。この聖なるクリスマスに豊かな愛の恵みを受けながら、もう一度身近にいる人々に対する愛を強め、お互いに大切に、喜びあいましょう。こうして、イエス様が言われたように、わたしたちは命を受け、しかも豊かに受けることができますように(ヨハネ10・10g)。

神学生日記

教区司祭 と修道司祭

ヨハネ 片岡 義博

皆さん、主の御降誕おめでとうございます。あつという間に神学校生活も半年が過ぎ、そして後期は行事も多く、早いもので気がつけばもう待降節、クリスマス・・・。

おかげさまで神学校生活もそれなりに形になってきたように思います。最初は授業についていくのも大変でしたが、最近はその時間を見つけて、神学校の庭で神父様がやっている畑仕事を手伝ってみたり、仲間と一緒に高尾山にハイキングに行ったりと、それなりに楽しみを見つけたから過ごせるようになってきました。しかし、それでも外出は少なく、神学院内にあることが多くなりがちで、心も大きくなれば良いのですが、先に体の方が一回り大きくなってしまい（笑

い）、体調管理には気をつけなければと感じる今日この頃です。

さてご承知のとおり、今年六月から来年の六月まで教皇様の意向により「司祭年」という特別な年を過ごしています。それによって神学生に対する信徒の皆さんの意識も高くなって下さっているように感じます。

しかし、日頃「神父」と人と接することは多くても、実際「司祭」とは何かというところは案外と知らないものなんだなあ」と自分を含めて思うことがあります。

今年の夏、私が神学生であることを知ったある信者さんが、「片岡さんは、どちらの修道会の神学生さんですか？」と尋ねられたので、「私は教区の神学生なんです」と答えたのです。そしたら、その方は「きょうく修道会ですか？あまり聞かない名前ですね？」と言われて、教区司祭と修道司祭のお話をさせていただいたことがありました。これは極端だと思いかもしれませんが、その後、神父様にその話をしたら、「時々そういうことを言われる信者さん多いらっしゃるよ」ということを伺いました。

確かに、一般の方々からみた



ら、同じ神父様であり、ミサでもほとんど同じ格好をして司式しているの、どのような違いがあるのか見分けがつきません。

簡単に説明すると、カトリック教会には、名古屋教区や東京教区、大阪教区など、各教会を地域ごとにまとめた教区と呼ばれる地区割りのほかに、修道生活をおして教会に奉仕する修道会があります。

教区司祭は自分の所属する教区の司教の監督のもとに働くことを約束しますが、修道司祭は所属する修道会の上長の監督のもとで清貧・貞潔・従順という三つの誓願による奉獻生活を志して働くことを約束します。もちろん修道司祭も、司教団の賢明な協力者です。

教区司祭は一定の地域に教会を存在させるのが最も大切な任

務です。修道司祭は、地域に固定されることなく、修道会の精神に従って必要な場所に行って教区の司教の権威のもとに使徒職を果たします。プリヨ神父様や牧野神父様もそうです。聖心布教会の会員の神父様なんて、城北橋教会をはじめ教区（司教様）から委託された教会を基盤に宣教司牧に携わっておられます。

しかし、先にも述べた通り、同じ司祭であり、教皇様の司祭年開催の告知の司祭の手紙の中でも、そういった区別は一切なく、全ての司祭が、聖ヨハネ・マリア・ピアンネの模範に促されて、司教との一致、司祭同士の一致、信徒との一致をあかしくするように祈り求めています。

私たちはミサの中で、「主はみなさんとともに」と司祭が唱えると、私たちは「また司祭とともに」と応えます。この司祭年を通して、私も皆さんと一緒に「司祭と共に歩む私たちの教会」を捉えなおす良い機会にしていきたいと思えます。

十一月に行われた神学院祭りに遊びに来てくれた山本道隆君と共に。二人ともにつきり、ピース。

祝クリリー神父 叙階50周年 アウグスチヌス 川口琢

七月二十五日に、オーストラリア管区の本部があるケンジントンの教会でクリリー神父様の金祝を祝う式典があり、川口琢さんが参列をされました。報告が遅くなりましたが、



その時の祝辞を掲載させていただきます。なお、クリリー神父様は今、胃潰瘍で入院されておりますので、皆様のお祈りをお願いいたします。

まずは、クリリー神父さんの金祝をお祝い申し上げます。私は川口琢、七十三歳、日本の城北橋カトリック教会から今日の式典のために参列しました、クリリー神父さんの友人（悪友）の一人です。

クリリー神父さんは叙階後、すぐ妹さんのシスター・エリザベスさんと

に日本に赴任され、銀祝まで二十数年を日本の信者と布教のために尽くされました。何より素晴らしい事は、温かい心の持ち主で、わけへだてなく、ハグ（抱きしめる）され、悩んだ信者を慰めていただきました。何人の信者が救われた事でしょう。

MSCの中でもそのことが不自然でなく、温かさが滲み出ていました。特に以前の日本ではハグする習慣は少なく、他の多くの神父様たちも、羨ましく思われていました。



出されます。黙想の家があるダグラスパークの時代、改革され、教会全員が一緒に食事をされ、スタッフからの人気は素晴らしいものでした。

私のオーストラリア訪問時はいつもパークさんの家で楽しい食事をしたものです。今回のことも、パークさんから電話があり、友人のお前ぐらいは、名古屋を代表して参加してはとの誘いがありました。

昨年、私は脳梗塞で倒れ、右半身にダメージを受けて足が少し悪いのですが、喜んで参加しました。

友人は大切ですし、かけがえないものです。クリリー神父様も、糖尿病を少しでも良くして、多くの信者のためにあなたしか出来ない祝福を与えていたいただきたいものです。本日はまたことにおめでとございました。

生きています

夏の日曜学校キャンプを後ろ目に、七月中旬から三ヶ月間フランスに行く機会が与えられた。フランスのほぼ中心に位置する古い田舎町イソダンに、聖心布教会と聖心の聖母会の創立地である。ここを拠点として研修会への参加、巡礼、共同体

聖心の聖母会

林 明恵



イエスの聖心に捧げられたイソダンの聖堂

訪問などをさせていただいた。過ぎてみればあつという間の三ヶ月だったが、内容の濃いお恵み滞在となった。感謝をこめて、この旅のお話をさせていただきます。

一ヶ月の研修会
この研修会は、聖心布教会(MSC)・聖心の聖母会(FDNSC)・聖心布教師妹会(MSCSisters)の三つの修道会から編成された特別チーム(Cor Novum 新しい心という意味)によって企画された聖心の霊性講座である。今回の研修会のテーマは「イエスの聖心と聖心の聖母の霊性」である。創立者シュヴァリエ神父が「マリ

ア」を第三の創立者としたこと、また聖心の聖母の称号宣言百五十周年を迎えた今年、改めて「マリア」のイメージを見直し、現代に生きる私たちにとって「マリア」がどのような方で、どのような役割を果たし、どこに位置するのかを、祈りと共に再発見する目的があった。世界十六ヶ国から約三十名の司祭・ブラザー・シスター・アソシエイト(信徒会員)が集まった。

研修は、講義と振り返り、ミサで一日が終る、ゆったりとしたスケジュールであった。まずヨハネス・ロジェ神父(フランス)による「シュヴァリエ神父の生涯」、ハンス・クワークマン神父による「シュヴァリエ神父の視点における聖心の聖母への信心」、シスター・マリー(フィリピン)による「マリアの再発見ーいくつかの現代的視点に立った、イエスの母、マリア理解」、ニック・ハーナン神父による「養育者としての聖心の聖母」、「聖心の聖母と養育者」と続いた。またゲストの講話者から「聖心の聖母と映画によるマリア」(ピーター・マローン神父)や「聖心の聖母と宗教間対話」(ロロン・ドーチン)「イソダンにおける聖心の聖母」(ダニエル神父)の話の聞くことができた。

週末には、創立者シュヴァリ

エ神父に所縁のある場所をミニ巡礼した。三週目には、四日間のミニ黙想があり、沈黙の時を過ごした。また、二回ほど参加者企画による楽しい「レクレーション・ナイト」があり、各国の文化発表やゲームで交流を深めた。

何ヶ国語も飛び交う研修期間で、参加者と一番長く交流する時間は食事である。一時間はゆるやかなフランス式の食事を、テーブルにたった仲間と共に過ごすのである。

今回出会った参加者は、言葉の壁がありながらも身振り手振りでよく歓談した。一ヶ月間寝食を共にした参加者は、聖心の内に結ばれた大きな家族としてお互いを知り、それぞれの国に帰っても祈り支える仲間となつた。

研修ではこうしたグループ発表もありました



二ヶ月間の個人プログラムバシリカの修道院にあるCor Novumの共同体で、お世話になることになった。研修の内容を補う時間を取ってもらいながら、週に三回、創立以来大切にされているマザーハウスを訪問し、熟年シスターから往年の宣教活動のお話を伺った。今や車いすでの生活となった老修道女は、当時の様子を熱く語り、若い私をあたたく包み、励ました。

聖心の靈性は

一部を垣間見ることとなった。イソダンに戻り、一人でバシリカの回廊を歩いていると、いつも聖母の前でベンチに座り、煙

中十日程、いくつかの共同体や巡礼地を訪問することが許された。様々な人や場所、信仰のあり方との出会いから、地方によって異なるフランス人の特性、「信仰の長姉」と呼ばれるだけの歴史的信仰の厚みと複雑な現実社会の

管を吹かず老神父がいた。いつの間にか、隣に座って話を聞くようになった。この宣教師は、教会の様々な問題や危機的状况に対して、「僕は八十一年以上教会を見てきたが、もっと失望的な状況に晒された体験があった。しかし見てごらん！今は昔に比べるとずっとマシだ！僕はポジティブな考えを持っているよ」と語ってくれた。そして、「マリアは付き合うのに一番難しくない方だよ」と教えてくれた。彼の聖母との関係にグツときた。瓶底眼鏡と白い眉毛の間から見える目は、少し遠くを見ていた。

聖心の靈性は生きている。「イエスの聖心」と言えば、十七世紀のマルガリータ・メリー・アラコックへのご出現であろう。

しかし、十九世紀までこの信心は、司祭・修道者の個人的、秘儀的信心業に留まり、一般信者には伝わっていなかった。これに対しシユヴァリ神父は、一般信徒にも広められるべきであると考へた。それは神御自身が人間であるシユヴァリエ一人のために十字架につけられ、死ぬまで愛してくださったという神の深い愛を悟ったからである。実は、十九世紀という時代は「イエスの聖心」信心が広く普及し、モンマルトルには「イエスの聖心」へ奉獻された聖堂が建てられた程である。

あれから約五十年経た今年、司祭年が制定され、そのモデルとして、聖ヨハネ・マリア・ピアンネが選ばれた。アル

世界ですら「命の大切さ」が説かれていた。まして私達には、イエスが示して下さった聖心を生きることが、切に求められていると、思うのである。

聖心の聖母称号百五十年周年が意味すること

この「イエスの聖心」を中心にしたマリア像に「聖心の聖母」という特別な称号が与えられてから百五十年が経った。今回はそれを記念として、初めて「聖心の聖母」が研修会のテーマとなった。研修会では「聖心の聖母」理解と信心業の刷新が話された。それは聖母マリアを祈りの取次ぎ者として崇敬し、巡礼するだけでなく、この世で行き

抜かれた生の「マリア」を黙想し、「マリア」の歩まれた道をモデルに、私たちも彼女のよう生きるよう招かれているというものである。何故ならマリアこそイエスの聖心を生きた一番弟子だからである。日々の生活の中で、恵みに満ちたマリアはイエスの栄光だけではなく、苦しみにも預かった。私たちも同じような恵みがたくさん与えられ、それを享受しながら日々成長するよう呼びかけられている。ここに現代の「聖心の聖母」の観想に意味を見るのである。

シスター・レオニラとパリ・ノートルダム大聖堂の前で



彫刻家ジョン・ピキル・オーギーの聖心の聖母像

スの小さな村にある、貧しく小さな教会に入ると向こう側には大きなステンドグラスの「イエスの聖心」が目飛び込んでくる。この教会の主任司祭だった聖ピアンネもまた「イエスの聖心」信心に熱心だった。このような人が今この時期に選ばれるというのは、とても意味深いように思う。フランス革命後の荒廃した教会の様子は、どこか現在の教会の様子に似たところがある。このような時代だからこそ、世俗の



現代の家族を みつめて

イグナチオ・ロヨラ

若林英樹

「降誕おめでとございませう。」

Merry Christmas!

今年の漢字「新」の字のごとく、新型インフルエンザ、新政権の誕生、そして新たにヘルマ又神父様も赴任され、今年は何日本社会と、そして城北橋教会にとつても色々な新しいことがあつた年でした。良い知らせもたくさんあつた一方で、暗いニュースも少なくありませんでした。社会の中であまり注目されない人々や課題にも光りがあたるといいなと思うことが多くあります。そういう風に言うと、何か特別な事柄のように考えがちかもしれませんが、何気ない日常生活や家族の中にもあるのではないかと思ひます。

私は家庭医療の診療と教育に携わっていますが、家庭医療は日本ではまだあまり認知されていません。諸外国では一診療科として確立し、米国では「Family Medicine」英国では「General Medicine」と呼ばれています。一人

ずつ、一つの臓器だけを見るだけではなく、家族全体をみて健康づくりや病気の治療を行うという考え方をします。書店に並んでいる「家庭の医学」と混同されることもあります、必ずしも同一ではありません。

日本ではこれまで、三世代が一緒に助け合いながら生活するというスタイルが一般的だったのですが、昨今は欧米化、経済成長とともに核家族が急増しました。同時に医療技術も進歩して、平均寿命が世界トップクラスに伸びました。高齢化率（六十五歳以上の人口の割合）は二〇一〇年で二〇％、今後さらに伸び続け二十年後には三〇％、四十年後には四〇％と推計されています。そのような急激な変化の結果として、どんなことが起こつてきているのでしょうか？

ある家庭では、八十歳を超える老夫婦が二人暮らし、八十五歳の夫は病気で三年前から寝たきりで八十歳の妻が介護しています。息子夫婦は少し遠いところに暮らしていますが、息子はこの不景気のなか会社のために毎日深夜まで懸命に働き、家族のことを振り返る余裕もありません。お嫁さんは家計を助けるためにパートに出ながら、受験を控える上の子どもの世話に懸命です。下の子どもが中学校でいじめにあい不登校になつてい

思い悩むな、と教えられていますが、もし自分だつたら、夜も眠れないかもしれません。状況は少しも好転せず、出口も見えてきません。帰国されたのか、来られなくなった方々も多くおられます。城北橋教会一年間の緊急支援も、残すところあと四ヶ月となりました。皆様からの大きなご支援を、仕事を失つた方達にお伝えするべく、私たちメンバーも変わらぬ頑張つていきます。十一月にはいつてシスター高良が、支援を受けに来られるブラジルやペルーの方達の現状を聞き取りされていますが、どのご家族も、もし自分だつたら夜も眠れないに違いないという状況を抱えておられるようです。ただ、私たちが接するとき、いつも皆さんは、元気で笑顔があり生気があつたります。互いに不完全であつても言葉や交わりたりしていると、なんだかこちらが元気を貰います。お米やパスタやミルクをお渡ししながら、元気でねと言つたのですが、こちらが元気を貰つていくことが悩みの種です。

緊急支援活動の報告

この家族のように、高齢者同士の老々介護、息子夫婦も忙しくサポートもなかなかできないということも日常的な家族の状況と言えるでしょう。問題に直面した時に、助け合つて乗り越えることができる家族もあれば、過労や抑うつ、その他の身体の不調を引き起こすことも珍しくありません。また、家族がバラバラになつたり、悲しい事態に陥つてしまつケースもあるよ

つです。統計データを見ると、介護にまつわる殺人、心中が介護保険導入（二〇〇〇年）以来、十年間で四百件、自殺者の数は毎年、年間三万人以上、決して人ごととは言えない数字です。もちろん、悲しい知らせばかりではありません。介護の分野においては、介護保険に伴い、介護のサービス（ヘルパーやデイサービスなど）や在宅医療（往診）の技術が進歩し、いろいろな支援と治療を受けながら自宅で安心して過ごせる道も開けてきました。まだ十分に普及していると言えませんが、「他人に家に入られるのは・・・」と、いつて躊躇される方も少なくありません。しかし、叩けば開ける扉もたらされてきたということです。また、過日当教会でも意識調査がありました自殺の問題について、うつ病と身体の病気が二大原因・動機であることが分つています。どちらもちきんと治



療を受ければ改善する可能性が十分にあります。うつ病についてはまだ偏見も多く、多くの方が正しく理解されているわけではないようです。うつ病の患者さんにとって辛いことの一つは、周囲の家族や親しい人に理解されず、「怠け者」として誤解されたり、無理に気分転換に誘われたり、励まされたりすることだと言われます。ますます罪責感を募らせ、「私なんかいない方が」という気持ちになることもあります。その一方で福音もあります。きちんと治療を続けられ、ほとんどのケースが改善するということが分っていることです。いずれの病気であっても、きちんと治療を受けることに加え、家族が正しく理解し必要な支援をする、つまり共に乗り越えていくという姿勢が、大きな助けとなります。この効果

今年も七十五歳以上の方に招待状を出して、九月二十日に敬老のお祝いをしました。祝福を受けられるために並んでおられる元気なお姿を拝見していますと、どうして教会のお年寄りはこのように若く洗剤としておられるのだろうと感心します。主に従って生きてこられた方々からでしょうか、神様の力が満ちあふれているように思えるからなのです。

敬老の日・おめでとつじやいます。

「神に従う人はなつめやしのように茂り、レバノンの杉のようにそびえます。主の家に植えられ、わたしたちの神の庭に茂ります。白髪になってもなお実を結び、命に溢れ、いきいきとし、述べ伝えるでしょう。わたしの岩と頼む主は正しい方、御もとは不正がない、と」(詩編92・13～16)

(後藤)

魅力ある侍者会を目指す

レオ 片岡達哉

についてはいろいろな臨床研究でも証明されてきています。イエスの誕生を祝うこの祝日に、このような家族の大切さや試練、そして、それがキリスト者として互いに愛し合うことを本当に実践する最も身近な場であろうということをも再認識したいと思います。

ご降誕おめでとつじやいます。僕は今春からリーダーとして活動してきました。かき氷やぜんざい・焼きいもを売って、そ

の利益で東京旅行にもいけました。しかし、春以降、教会に来てくれる中高生が減って正直とまどいや不安でいっぱいでもありました。活動ができない、やっていてもひとりふたり。これは本当の形じゃないかと思つています。みんなで協力して、その結果、「楽しい」ことができる。そしてみんなが相談し合える仲間。来年以降は「魅力ある会」を目標にやっていき、みんながまた来てくれる会にしたいです。そして、来年春・夏に旅行にも行きたいなと思つています。

僕は、小学生のとき正直日曜学校があんまり好きではなかったです。なぜならば、リーダーが兄貴だったから。そして侍者をやつていけば日曜学校に行かなくて済むと思つていました。でも、朝早いし、神父様の説教は眠たいのでよくあくびをして

怒られていました。(笑)

大学生になつて、リーダーを任されるようになったとき、「自分がやるだけなら簡単。できる子をいっぱいにしたい。育てたい。」気持ちが強くなりました。

僕の思う侍者は、神父様や信者のみなさんに「魅せる・見られるお仕事」(ボ



頑張ったね(11月8日の侍者会)

ランティア)だと思つています。動きは難しくもないけど、どう動いたらもっと気持ちよくミサを進めて、また受けてもらえるのか、これが難しいのです。自分なりに考えて、小中学生にカッコいい侍者になつてもらうため

に教えていきたいと思つています。

僕自身の今後の目標は「ありがとつ」を言える人・言われる人です。自分が小中高生のとき、一緒に侍者をしてくれる友達、中高生会の活動に参加してくれる友達、そして活動を温かく見守ってくれる城北橋教会の皆さんがいてくれました。僕を支えているのは皆さんの「ありがとつ」ではないのかなって思っています。「一緒に」「続ける」「楽しい」・「友達・信者のみなさん」で「ありがとつ」が城北橋教会にはたくさん！そう思っているから僕は城北橋教会が好きです。

十月八日の台風十号により、ユークの枝が折れ、マリカのアーチも歪んで倒れてしまった。ブリ

わつたからか、優しい雰囲気となり、温かい祈りの場所になったような気がします。

来年のマリア祭が待ち遠しいですね



ヨ神父様は南区にあるホームセンターまで車を飛ばし、材木など資材を調達、すぐさま修理に取り掛かり、見事な木製の棚に作り直されました。鉄パイプと違って木製に変

教会と私

ローザ
松井淑子

両親がカトリック信者であったので、私は幼児洗礼を授かり、物心ついた時から教会に通っており、私の両親は、今はオーストラリアにいらつしやいます。クワーク神父様から福井教会で洗礼を授かりました。両親とも仏教の家で育ちましたが、神父様や伝道してくださる先生の話や聞き、カトリックに改宗しました。改宗するということが容易なことではないと思いますが、何かよほど心を動かされたものがあつたのでしょうか。神様の大きなお恵みであつたと思います。この城北橋教会には、小学校四年生のときからお世話になっております。日曜学校にも通わせていただきました。クリスマスに聖劇をやつたことなど今でも覚えております。教会では、たくさんすばらしい神父様やシスター、そして信者の方々にお会いしました。もし、この方々にお会いすることがなかったら、今の私とはまったく考えが違つた人になつていたことと思います。

私の二人の息子はまだ洗礼を受けておりませんが、日曜学校や「子どもの家」に通わせてもらいました。小さいときから教会へ通い、神様のお話を聞かせていただいたことや教会で聖歌を歌つたことなど、とても幸せでした。二人ともまだ、一人前とは言えませんが、なんとかまっすぐに育つてくれているので嬉しく思います。教会での教えがあつたからだと感じております。今は毎週、母と二人で教会へ通つております。今日も教会へ来る事ができてよかつたなあと感じながら御ミサにあずかせていただいております。

城北橋教会の神父様、シスター方、これからも私たち信者をどうぞお導きくださいませ。よろしくお願いいたします。

長尾溪子さんの 思い出 マリア・エウフラシア 飯田京子

溪子さんは重度の障害者でした。体も動かせなく、言語障害も有つて、自分の意志をはつきりと伝えることもできませんでした。でも、自分の手足となる

ヘルパーさんをもて上手に使つていました。その人の特質をみて、銀行、役所、パソコン、CD、縫い物、外出など役割もほぼ決めていました。外出するときでも、コンサートやカラオケなどは行く人の事も考えていました。ご両親のお陰で経済的に豊かな暮らしでしたから溪子さんのしたいことは、ほとんどお手伝いすることができ、良かったと思つています。このように体で七十年の長い生涯を一生懸命に生きて来られたのも、多くの神様、シスター、信者の皆さん、身内の人達の、優しい、お気持ちに支えられての事、

溪子さんも心より、感謝しておられました。有難うございました。今は、安らかに、復活の日

に、皆様とお会いできる事を楽しみに待つて居られると思ひます。良いことも多くされ、自分は何も出来ないからと、献金、寄付、国内外を問わず、貧しい子供たちも沢山救われました。楽しいこともいろいろありました。母と慕つておられた文先生が東京にいらつしやる時は、二泊三日で、二回も行き、ホテルと一緒に泊まっていたことができました。思い切り甘えて、次の日は先生の案内で教会をまわり、地下のとても広い納骨堂で、すばらしい、ステンドグラスに驚き、感激したりしました。また素敵

葬儀問答シリーズ 田口保

問) 映画「おくりびと」をご覧になられた方も多いのではないかと思います。この主人公である納棺師が湯灌をし、経帷子を着けさせておりますが、キリスト教でも同じように行いますか？

答) 全く同じではありませんが、旧約の時代から葬習慣として行われております。たとえば「香」ですが、これは腐敗していく死体の臭いを防止する処置として使用されておりますとともに、香の煙が空に上がるごとく、人々の祈りが主の許に届くようにという願いの印でもあります。「あなたは平和のうちに死ぬ。人々は、あなたの先祖である歴代の王の葬儀に際して香をたいたように、あなたのために香をたき、『ああ、王様』と言って嘆くであろう。このことをわたしは約束する、と主は言われる」(エレミヤ34・5)「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持つて来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」(ヨハネ19・39~40)このような聖書の記述から伺えるように、すでに二千年以上前から中東地域では「香」が使用されております。また宗教の違いから当然のことですが、仏式で使用される帷子ではなく、亜麻布で体を巻いて包んでいたのです。ですから、日本で行われている葬習慣と概ね同じと言えると思います。従つて、死体(=死者)を水やアルコールで清め、故人が生前愛用していた衣類を着せることは、決して非聖書的ではなく、むしろ、死者を丁寧な葬ることになり、聖書的といえましょう。

不思議発見

シリーズ最終回



今回の不思議はキリストの銘についてです。祭服とか説教台を飾る布に、IXとかXPあるいはIHSと書かれている文字は何を意味するのでしょうか。それはIH OY (イエス)とXP ICTOC (キリスト)という二つのギリシャ語の組み合わせから出来た文字なのです。IXはイエス・キリストの頭文字から来ていますし、XPはキリストの最初の二文字です。ギリシャ語のIはラテン語ではSに変化しIHSはギリシャ語イエスの最初の三文字から来ています。いずれもイエス・キリストを意味します。しかし、聖ザビエルの絵で有名な十字架のついたIHSを紋章としているイエズス会はIESUS (イエス) HOMINUM (人類の) SALVATOR (救い主)というラテン語の頭文字からとられていると説明しています。十字架上で目にしますINRIという文字は説明するまでもなくキリストの罪状を記したもので、IESUS (イエス) NAZARENUS (ナザレ) REX (王) IUDAERUM (ユダヤ人)というラテン語の頭文字です。「ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それにはナザレのイエス、ユダヤ人の王と書いてあった」(ヨハネ19・19)と書いてあるとおりです。



最後は納骨堂の扉にある魚です。中学二年生の時に、駅前にありましたメトロという映画館で見たクォ・ヴァディアのシーンを、今でもはっきりと覚えています。デボラ・カーという凄美人が棒で砂の上に魚の絵を描き、恋人であるローマ兵に扮するロバート・テイラーにキリスト教徒であることを示す場面なのです。

このようにローマの迫害に喘ぐ初期キリスト教徒にとっては魚はキリスト自身のシンボルでした。詳しく知りたい方は辞書で調べていただくとして、ここではギリシャ語で魚を意味する言葉がラテン語の「イエス・キリスト、神の子、救い主」の頭文字からなっているとだけ書いておきます。語源より重要なのは、言葉の意味から分かるように、シンボルというよりは、信仰宣言になっていることだと思います。旧約聖書と新約聖書で魚が登場する場面を探してみましょう。田口さんの葬儀社では、よく花で魚の形にして棺を飾っていただきましたが、主の命令から逃れようとしたヨナは巨大な魚に呑みこまれ、三日三晩魚の腹の中にいた後、陸地に吐き出されました。これは「陰府に下り、三日目に死者のうちから復活し」と使徒信条で唱えますように、勝利者として復活するキリストを予示していると言われてしますので、棺を飾るに相応しいからなのです。また言うまでもありませんが、「ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼は漁師だった。イエスはわたしについて来なさい。人間をとる漁師にしようと言われた」(マタイ4・18~19)とありますように、魚は掬い取られる人間の魂をあらわしているとも言えます。その他、パンと魚が増える話や、ペトロに魚を釣らせ、魚から出てきた銀貨を神殿税として収めさせる話など、魚に纏わる事柄は多いのです。ですから初期キリスト教徒にとって魚はまさにクレドだったのです。(文責 後藤明憲)

ビは歌です。カラオケにも月に一回は行っていました。菊人形、写真、絵画、今年動物園に五十五年ぶりに行き、ゆつくりと植物園も見て、本当に嬉しく、大感激でした。私も最後までお世話をして旅立ちを見送ることができ、心から神に感謝しております。

聖心の聖母 への祈り ヤコブ 後藤明憲

ヨゼフ・ユーカリスチア尾畑

勲君が膀胱癌であつたという間に天国に召されてしまった。五十歳の若さだった。帰天、一ヶ月後の十二月十九日の夜に追悼ミサをあげていただいたのだが、その日は土曜日だったので、待降節第四主日の典礼で行われた。何時もの年だと、その頃はご降誕直前ということもあって、ク

リスマスイルミネーションの華やいだ雰囲気、浮き浮きした気分になってしまっているのだが、今年ももう一つのご降誕であるキリストの再臨を待つという機会を、尾畑君を通して与えられたような気がした。予想も

四時間以上に亘る病室での会話を思い起こすと、いつも目を覚まして祈りなさいという、み言葉の通りの闘病生活だったことに気づかされた。目の前で嘔吐と痛みを震わせた尾畑君であったが、本当に救いの完成を待ち望んだ希望の日々だったのだと、今、そう確信をして

いる。家庭の事情で、ブラザーへの道を断念せざるをえなくなつたとき、本部前の芝生でクリリー神父が「君の笑顔はどこにいったの？」と心配そうに慰めてくれたこと、また、聖心の聖母への祈りを唱え始めた時、彼が修練生時代に、「あのクソ親父から、何度も何度も駄目出しをされて苦労した」と、冗談混じりに、聖心の聖母への祈りの日本語訳に悪戦苦闘したこと話してくれた。この祈りは牧野・高山両神父様の名訳だと聞いていたのだが、彼もこの日本語訳の一翼を担っていたのだ。まるでマリア様を脅迫しているような凄い祈りだと、日頃、自分自身が感じていたその原因がクワーク神父様の熱い気持ちからだと分つたのである。マリア様に聖心の聖母という特別な称号を贈られた聖心布教会の創立者であるシウヴァリ工神父様の聖母に対する深い信頼が込められているこの祈りは、優しく綺麗な言葉ではなく、もっとストレートに自分たちの気持ちや伝わるような訳でなければ駄目だ」というクワーク神父様の注文から生まれたのだ。だから、彼が病床の中で、マリア様の取次ぎを願い、救いの完成を待ち望んでいたのは間違いない。死を考える年齢になつたとはいえ、まだまだ執着し過ぎていて自分との距離は大きい。主よ、みもと

に召された尾畑君に永遠の安らぎと、あなたの光りの中で憩わせてください。

信者動向

【転入】
宜しくお願ひします
ヨゼフ 岡田 勝三
十月 大垣教会より

【転出】
さようなら
マリア・マザーテレサ 木川 千栄
フランシスコ 啓緒(ひろつぐ)
信款(あきよし) クララ 静

福岡教区 浄水通教会へ
十月十九日

【結婚】
おめでとございませう
田中 洋平
アグネス 成田 雅子
十月十七日



福谷 学
エリザベト 江口 千恵子
十一月七日



【帰天】
アウグスチナ 長尾 溪子
享年六十九歳 八月十七日
ヨゼフ・ユーカリスチア
尾畑 勲 享年五十七歳
十一月十八日

編集後記

待降節はキリストの誕生を待ち望み、イエス様をお迎えするために、その道を整える期間ですが、同時に主の再臨を待ち、喜びの終末を思い起こす時でもあることを、今年は二人の帰天者を通して、深く味わうことができました。クリスマスツリーはドイツ国境に近いフランスのアルザス地方で宗教革命直後の十六世紀に生まれたと言われていますが、当初はもみの木に原罪の象徴であるリングと救いの

象徴である丸いパンを下げたそのですが、飾り物だらけの現代のクリスマスツリーは、受肉のイエス様だけに目がいつているからでしょうか。また今年も九という数字が持つ意味も考えることもできました。十二月八日の無原罪の聖マリアと十二月二十五日の主の降誕という二つの大祝日がつきかけでした。三の自乗である九は、三位一体の神がもたらす奇跡の数だと言われていますが、十二月八日の九ヶ月後の九月八日は聖マリアの誕生日であり、十二月二十五日の九ヶ月前の三月二十五日は神のお告げの大祝日であることに気が着いたからです。この受胎から誕生までの九ヶ月という準備の期間をどう考えたらいいのでしょうか、神学生の片岡君のために祈りを続けたいと改めて思



七五三の祝福式 11月15日

十一月十五日に七五三の祝福式がありました。千歳あめとメダイの祝別のあと、プリヨ神父様は子供たち一人ひとりを祝福し、メダイを首にかけられました。親御さんの笑顔も素敵でしたが、一番喜んでおられたのが神父さまでした。(後藤)